

万葉集2171番歌の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the 2171th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集2171番歌は、注釈書により訓釈の多少の違いはあるけれども、「白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き 我が心かも」と訓読され、「白露と秋萩の両方に惹かれて心が乱れ、どちらかを選び取ることができない私の心だなあ」と解するのが通説となっている。しかしこのような解釈にはいくつか疑問がある。例えば、通説では白露と秋萩の両方に対して「恋ひ乱れる」と解しているが、万葉集には「花」に恋する歌は多いけれども、「露」に恋する歌など一つもない。また、春と萩を比較対照して優劣を判定する歌は万葉集や古今和歌集にも例があり納得がいくけれども、白露と秋萩のようなまったく異質なものを比較対照し、しかもどちらがより好きかをなぜ決めなければならないのだろうか。本論文では通説のこのような問題点を再検討した上で新しい解釈を提案する。

1. はじめに

万葉集2171番歌は巻十の「秋の雑歌」の「露を詠みき」と題する歌の一つである。この歌の第二句の訓読については注釈書により若干の違いがあるが、歌全体の意味はほぼすべての注釈書で一致している。本論文の目的は、従来の解釈の妥当性を再検討し、第二句の訓みを確定した上で新しい解釈を提案することである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう^[1]。

10/2171 白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き 我が心かも

【原文】白露 与秋芽子者 恋乱 別事難 吾情可聞

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載しよう。記載形式をそろえるために内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

① 新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き 我が心かも

【現代語訳】白露と秋萩と両方に惹かれて心が乱れ、どちらかを選び取ることができない私の心だなあ。

【注釈】「白露と秋の萩と」は、並列・列挙である。「鴛鴦（をし）とたかべと」（二五八）、「妹と我と」（一二九〇）、「君と我と」（四一七七）。第四句の「別く」は、白露と萩の花とどちらがより好ましいか判定すること。代匠記（精撰本）は「うちなびく春の柳と我がやどの梅の花とをいかに別かむ」（八二六）と、紀貫之の「春秋に思ひ乱れて別きかねつ時につけつつうつる心は」（拾遺集・雑下）とを挙げて、「今の歌に似たり」と言う。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】白露と 秋萩とには 恋ひ乱れ 別くこと難き 我が心かも

【現代語訳】白露と 秋の萩とその どちらを取るべきか 決めかねる わたしの心よ

【注釈】白露と秋萩とには恋ひ乱れ——白露・秋萩の両方に心が引かれ、思い迷って。○別くこと難き——四段の別々は、判断する、分別する、の意。萩が不愍（ふびん）で露を払うべきか、露の光を愛して萩の痛々しさを無視すべきか、思案に余ることをいうのであろう。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き わが情かも

【現代語訳】白露と秋の萩と、ともに恋しく心が乱れ、いずれがよいとも区別しにくいわが心よ。

【注釈】白露と秋の萩とは——「は」とあるのは主題の提示。両者は開花にも散花にも密接し、しかも対立するものとして歌われる。○別くこと難き——類想→八二六。

④ 萬葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別く事難き 吾が心かも

【現代語訳】白露と秋の萩とは、そのいづれにも心惹かれ、思ひ乱れて、いづれがよいとも判定のつき難い私の心であることよ。

【注釈】白露と秋の萩とは恋ひ乱れ——全釈に「白露と萩とが互に恋するやうにも見えるが」と云はれてゐるやうに、現代の人には、白露と萩とが恋ひ乱れてはなれられぬ、といふ意味にとりたくなるやうであるが、佐佐木氏も「それでは、四五句との連絡が困難である」と云はれてゐるやうに、早く拾穂抄に「露も恋しく萩も恋しければいづれと分かつたきと也」といひ、代匠記にも「恋乱ト白露ト芽子トヲ共に痛ク愛スル意ナリ」とし、

打靡く春の柳と吾がやどの梅の花をといかにかわかむ（五・八二六）

秋に思ひ乱れてわきかねつ時につけつ、うつる心は（拾遺集巻七） 紀貫之

の作をあげて「今ノ歌ニ似タリ」と云はれてゐるのに従ふべきである。新考に「ハとありコヒとある穩ならず」といひ「秋芽子花与入乱アキハギコノハナトイリミダレ」の誤として上三句を序としたり、柿本集や古今六帖に第三句を「こきまぜて」と改めたりしたのは、「恋ひ乱れ」で切つて考へるからであつて、この「恋ひ乱れ」は「別く事難き」につゞくのであり、上の「は」はむしろ「別く事」につゞくと見れば、おちつくのである。三句切の習慣に禍された誤解だとも云へるであらう。

【考】古今六帖（一「露」）「白露を秋の萩原にこきまぜて」「わがこゝろかな」、柿本集（下）と新勅撰集（四）とに「秋の花とをこきまぜて」「わが心かな」とし、後者柿本人丸としてゐる。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【訓読文】白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き わが情かも

【現代語訳】白露と秋萩とが、心乱れるほど好きで、どちらがいつそう好きかと、はっきり区別できない気持ちである。

【注釈】なし。

上に示した五つの先行研究を見ると、まず訓読に関しては、②が第二句を「秋萩とには」と訓むのに対して、①、③、④、⑤は「秋の萩とは」と訓んでいる点で少し違いがある。次に解釈については、それぞれの注釈書により表現上のわずかな違いはあるものの、この歌の意味を「白露と秋萩が共に好きで、どちらがより好きかは区別できない」とする点ではすべて一致している。

以下の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解消できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

まず第三句の「恋ひ乱れ」という表現について考えよう。前節に示した五つの先行研究はいずれもこの表現を「白露と秋萩の両方に心が惹かれて」と解している。しかしながら、この歌が巻十の「秋の雑歌」の中の「露を詠みき」という題詞に属する歌であることを考慮すると、この歌の中心テーマはあくまでも白露で、秋萩は脇役のはずである。だとすると、通説のように白露と秋萩の両方に同じ程度に心が惹かれて優劣がつけ難いとする解釈は少し不自然である。もし通説が言うような意味であるならば題詞は「白露と秋萩」となるのではないだろうか。これが第一の問題点である。

また通説では、「恋ひ乱れ」を「心が惹かれる」や「心が乱れるほど好き」などの意に解しているが、このような「恋」の解釈は現代語的であり、万葉時代の用法からすると問題がある。「時代別国語大辞典」は「こひ（恋）」について次のように書いている（下線は著者による）（[7]、p. 305）。

万葉集に恋を表わすのに「孤悲」という字をあてたものが三〇例ほどあり、この表記は恋^{こひ}というものがどう考えられていたかを端的に示している。それは相手が目の前にいないのを淋しく思い、求めしたう心である。人についていうことのほかに花や鳥、自然の景物についていうことも多い。

この考えに従うならば、もし通説が言うように「恋ひ乱れ」の「恋」が白露と秋萩に対する気持ちであるならば、いま作者の目の前には白露と秋萩は存在していないことになる。しかしこれでは、「白露と秋萩の両方の美しさに同じ程度に心が惹かれて優劣がつけ難い」とする通説と矛盾してしまう。なぜならば、通説のような解釈は、白露と秋萩が実際に目の前にあり、实景を詠んだ歌と解してはじめて成り立つ解釈であり、もし实景の歌でなく、かつ内容が通説のようだとすると、この歌は、その気になりさえすれば白露と秋萩を実際に観察して優劣の判断ができるのに、あえてそれをせず、単に空想の中だけで「恋ひ乱れ」、空想の中だけで「優劣の判断」をしようとする架空の歌になり下がってしまうからである。これが第二の問題点である。

第三の問題点は、「恋ひ乱れ」を「白露と秋萩の両方に恋ひ乱れる」と解することへの疑問である。「秋萩」を恋する歌はいくつも例があるが（1364、2122、2124、2145番歌など）、これに対して「露」はほとんどが「はかないもの」の比喩として用いられ、「露」を恋する歌は万葉集はもとより古今和歌集にも例がない。すなわち、「露」は少なくとも古代の日本人にとって「恋」の対象ではないのである。ちなみに、

万葉集には「露」と「恋」を共に含む歌が20首ほどあるが（古今和歌集は1首）、その中に「露」（または「白露」）を「恋」の対象にしている歌は一つもない。この事実は、通説のように2171番歌を「白露」（と秋萩）に「恋ひ乱れる」と解することに大いに疑問を抱かせるのである。

さて次に、①と④は、紀貫之の拾遺集の歌と万葉集826番歌が万葉集2171番歌と内容的に似ているとする代匠記の考えを支持しているが、ここでその妥当性について検討してみよう。まず拾遺集の歌の内容と現代語訳を新日本古典文学大系本に従って掲載する^[6]。

ある所に、春秋いづれかまさと、問はせ給けるに、詠みて奉りける

509 春秋に 思ひ乱れて 分きかねつ 時につけつ、 移る心は

【現代語訳】春と秋とのどちらがすぐれているのか、春秋の両方にひかれて思い迷い、判断しかねている、時節に応じて、移り変わる私の心は。

この歌の題詞から判断すると、歌中の「思ひ乱れて 別きかねつ」が、春と秋の優劣判定を人から求められたものの優劣の判断がつけ難く「思い」が「乱れている」という意味であることは疑いない。このことは、春と秋に関する優劣判定の問題が、額田王の万葉集16番歌にもあるように、古くから有名なテーマであることともつじつまが合う。これに対して2171番歌の場合は、もしこの歌を通説のように優劣判定の歌だとするならば、比較の対象は白露と秋萩ということになるが、この二つは古来比較対照された例がないばかりか、「白露と秋萩に恋ひ乱れる」とする解釈はすでに述べたように「白露は恋の対象ではない」という事実に反している。このように、紀貫之の歌と2171番歌との類似はあくまでも表面的なものにすぎず、内容的には必ずしも同じではない。

次に代匠記が引用しているもう一つの歌（万葉集826番歌）について検討してみよう。参考のため、一つ前の歌といっしょに示す。

05/0825 梅の花 咲きたる園の 青柳を ^{かづら} 縷にしつつ 遊び暮らさな

05/0826 うちなびく 春の柳と 我がやどの 梅の花とを いかにか別かむ

通説はすべて826番歌の結句「いかにか別かむ」の「わく＝別く」を「二つのもの（柳と梅の花）の優劣を判定する」という意味に解している。しかし、一つ前の825番歌から、梅の花が咲いている園には青柳もいっしょに生えていることは明らかであるから、826番歌は「春の青柳と梅の花とが同じ園の中に渾然一体と『入り乱れて』存在しており、両者を別々に分けて観賞することはできない」という景観を詠んだものと解すべきではなかろうか。すなわち、結句の「わく＝別く」を、通説のように「二つのものの優劣を判定する」の意ではなく、「空間的に二つのものが入り乱れて存在しており、二つを別々に分けて見ることはできない」と解するのである。実際、このように解する方が次節で述べる2171番歌の新しい解釈ともコンシステントになることが示される。

以上見てきたように、前節に示した五つの先行研究（①から⑤）の解釈には少なくとも三つの問題点があることがわかった。次節ではこれらの問題点をすべて解消できる新たな解釈を提案する。

3. 万葉集2171番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈の結果を示し、その後にそれぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず2171番歌の訓読、直訳、意識を示す。

(訓読) 白露と 秋の萩とは 恋ひ乱れ 別くこと難き 我が心かも

(直訳) 白露と秋の萩と(の関係)は、恋い乱れてものの区別もつけ難い今の私の心の状態と似ていることだなあ。

(意訳) 目の前の秋萩には、小さな葉の上にたくさんの白露がのっており、その中に入り乱れるようにしてたくさんの花が咲いている。このように白露と萩の花とが入り乱れて存在している様子は、ちょうど今の私が恋のためにものの区別もつかなくなるほど乱れているその心の状態と似ていることだなあ。

新しい解釈では「恋ひ乱れ」の「恋」の対象は白露と秋萩ではなく作者の恋人(人間)である。この点が通説と根本的に異なる点である。新しい解釈では、前節で指摘した三つの問題点のうち第二番目(「恋」の用法)と第三番目(白露は「恋」の対象ではない)はおのずと解消する。また、第一番目の問題点についても、この歌を通説のように二つのものの優劣判定と見るわけではないから、歌の中心テーマは白露でも萩の花でもかまわず、題詞に「露を詠みき」と記載されていることとも矛盾しない。よって、第一の問題点もまた解消する。さらに、このように白露と萩の花が空間的に入り乱れて存在しているとする解釈は、前節でも指摘したように826番歌を「同じ園の中に、青柳と梅の花が空間的に入り乱れて存在しており、二つを別々に分けて観賞することはできない」とする新しい解釈ともコンシステントである。

なお、異性への「恋」のために「ものの区別がつかなくなる」例として次の三首がある。最初の歌は「年月の区別」がつかなくなる例、後の二つは「夜昼の区別」もつかなくなる例である。

11/2536 息の緒に 妹をし思へば 年月の 行くらむ別も 思ほえぬかも

12/2902 我が恋は 夜昼別かず 百重なす 心し思へば いたもすべなし

12/2940 なかなかに 死なば安けむ 出づる日の 入る別知らぬ 我れし苦しも

また2171番歌の文法構成は、新しい解釈のもとでは、第一句と第二句が格助詞「は」を伴って主部となり、第三句と第四句が連体修飾語として第五句の「我が心」を修飾し、最後に詠嘆の「かも」で終わっている。実は、これとよく似た文法構成の歌がほかにも存在する。

10/2052 この夕 降り来る雨は 彦星の はや漕ぐ船の 櫂の散りかも

さて、もし上に示したような新しい解釈が正しいとすると、第二句の訓読の問題もまた完全に解決する。というのは、新しい解釈のもとでは、第1節の②の「秋萩とには」という訓みでは意味が通らず、必然的に「秋の萩とは」という訓みに確定するからである。

最後に、新しい解釈では、白露と秋萩の花が入り乱れて存在していることが前提となっているが、その根拠を示しておこう。次の写真に示すように、萩はマメ科の植物で小さな葉が多数あり、その葉の中に混ざるようにして小さな花が多数点在する。したがって、2171番歌に詠まれているように、たくさんの葉の上のった白露とたくさんの花が入り乱れて存在している様子は「実景」と考えてよい。

4. おわりに

本論文では、万葉集2171番歌の解釈について再検討を行い、新しい解釈を提案した。主なポイントは次の三つである。第一に、第二句の訓みは「秋萩とには」ではなく「秋の萩とは」であること。第二に、第



三句の「恋ひ乱れ」の「恋」の対象は白露と秋萩ではなく作者の「恋人（人間）」であること。第三に、第四句の「わく（別く）」は「二つのものの優劣判定をする」という意味ではなく「空間的に入り乱れて存在しているものを分離する」という意味であること。

また、826番歌の解釈について、結句の「いかに別かむ」の「別く」は2171番歌の第四句の「別く」と同じく「空間的に入り乱れて存在しているものを分離する」の意に解すべきであることを指摘した。以上のような解釈や指摘が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1]「萬葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 506、2000年。
- [2]「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 117、1995年。
- [3]「万葉集 原文付全訳注（二）」、中西進、講談社文庫、pp. 370-371、1980年。
- [4]「萬葉集注釋 卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 367-368、1962年。
- [5]「萬葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 118-119、1960年。
- [6]「拾遺和歌集」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 145、1990年。
- [7]「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。